

第 1575 回（6 月 1 日）

ロシアの経済危機と農業問題

柴 崎 嘉 之

91 年に入るとコメコン体制は崩壊し、続いて同年 12 月にはソ連邦が解体した。ロシアを含む旧ソ連は、旧コメコン諸国との貿易が急減したことや、旧ソ連の各共和国間の貿易品目の数量や価格をめぐる交渉が難航したことにより、物資の流通量が著しく減少し、経済状況を悪化させている。

92 年からロシアは、不合理な価格体系を市場で形成される合理的な価格体系に変えようとして価格を自由化し、また、88 年以降毎年連続して記録した巨額の財政赤字を主として紙幣の乱発で対処したためルーブル価値が低下し経済混乱を招いたことを反省して、厳しい財政・金融面の措置をとった。しかし、このような急進的な経済政策の実施は予想を上回る生産の急減、物価の高騰、国民の生活水準の低下を招いたため、92 年 4 月頃から政策の見直しを行い、多額の債務をかかえる国営企業の救済や農業関係補助金の再導入等が行われたが、このことはインフレーションを加速化させつつも、生産減をくいとめることはできなかった。

92 年において、ロシアは、生産の急減、物価の高騰にみまわれた。すなわち、対前年比での減少率は、国内総生産が 19 %、工業生産が 18.8 %、農業生産が 8 % となり、一方、物価の上昇率は、消費者価格が 26 倍、工業卸売価格が 34 倍にもなるなかで、労賃の上昇は 13.4 倍にとどまったため、国民の生活水準は低下した。このような状況は 93 年に入っても続いている。

経済不振のなかで、農業もまた危機的な状況におちいつている。92 年における対前年比での価格の上昇率は、農業投入財が 23 倍、農業基本建設費が 30 倍なのに対し、農業生産物の販売価格は 10.6 倍、うち、畜産物は 6.9 倍

にとどまったため、農業は価格関係で不利となった。

農業生産手段の供給も減少し、また、あまりにも高価になりすぎたため、農業側の購入意欲も低下したこともあって、化学肥料等の施用量は危機的なまでに減少し、また、農業投資も急減している。

92 年には天候条件にも比較的恵まれたため穀物の収量（調整後の重量）は 1 億 960 万トンとなり、不作だった前年よりも 20 % 増加したものの、86～90 年平均に対しては 2 % 増にとどまった。

飼料不足、投入財価格の高騰、国民の実質生活水準の低下による畜産物の販売難により、畜産部門は危機的な状況にあり、第 2 次大戦中でもみられなかった種畜（例えば搾乳量の高い乳牛の種畜）のと殺すら行いう事例がみられた。92 年において、対前年比で、飼養頭数は牛が 6.8 % 減、社会化部門の豚が 13.8 % 減となり、畜産物生産（全経営類型）は食肉が 12.6 % 減、牛乳と鶏卵がそれぞれ 9.6 % 減となった。92 年 1 月～9 月において前年同期比で 1 人当たり消費は食肉製品が 12 % 減、牛乳・乳製品が 18 % となった。

ロシアにおいて 90 年より開始された個人農の創設は急速に進み、92 年末には 18 万 4,000 戸（平均規模約 43 ha）となった。しかし、主として、辺りで、肥沃度の低い土地が配分されており、化学肥料、農薬、小型の農業機械等の入手や農産物の販売でも困難に直面している。コルホーズ、ソフホーズを株式会社等に転換する事例がみられるが、内部での労働に対する関係は変わっていない。

深刻な経済不振のなかで、ロシア農業再建の兆しは依然として見い出されない。